

# エジプト文字で名前を書く

1

塚本明廣 (つかもとあきひろ)  
佐賀大学教授

今から五〇〇〇年以上前に発明されたエジプト文字は、二五〇〇年ほど前に途絶えた。その間、エジプト人は絵文字風の象形文字を使い続ける一方で日常の使用に適した簡略な筆記体を発明し、生活のあらゆる相を記録した。現在有力な説では、エジプト文字は西アジアに伝わってセム文字を生み、それがさらに西はギリシャ文字からラテン文字へ、東はインド文字へと独自の発展の道を通った。ところで、コプト語と名を変えたエジプト語は数世紀前まで生き延びた。いま、日常語への復興運動があるそうだ。

神殿や墓の壁を飾るエジプト文字は、見かけは一樣でも三種類の使い方が混じっており、表語文字、表音文字、限定符(決定詞)に分類できる。今回は、そのなかの表音文字としての用法に焦点を絞って紹介しよう。この用法であれ、納まりよく詰めて書かれる。

表音文字の用法とは、漢字の仮借つまり当て字の用法である。文字が担う意味を無視し、発音のみを借りて語を書きあらわす方法だ。「印字」を構成する漢字一字一字のもつ意味が無視されるようなものである。表音に特化したかな、




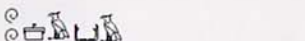
たとえば「安」から発達した「あ」は、字源となった漢字の意味とは無関係に、この音をもつどんな語に対しても使える。

かなに比べてエジプト文字が難しいのは、文字が表音文字として使われているのか、それとも別の使い方なのか、一見してわからない点にある。万葉がなにとえるべきかも知れない。エジプトの表音文字には、エジプト語の全子音を網羅する二四文字からなる単子音文字(エジプトのアルファベットとよばれる)のほかに、一文字で二音以上の子音を含む多子音文字があり、通常はそれらを混在させて使う。その結果、表音文字の種類だけでも二〇〇字近くになる。といつても常用文字はほぼ決まっている。多子音文字にしても単子音文字をふりがなのように補うので憶えやすい(表記例の「大阪」)。慣れればかなと同じである。あやふやな文字にであったときのふりがなや送りがないように、心強い味方となる。

かなが子音と母音の組み合わせであるのに対し、エジプト文字には母音の文字がなく、子音しか書き分けられない。もつとも、新王国時代には楔形文字の影響とされる母音表記の試みが見ら

れる。したがって、日本語の名前を書く場合、母音をどう書きあらわすかが一番の問題である。アラビア文字に似て、アは子音文字で、イとエは区別せず、ウとオも区別せずで書きあらわすこともできるが、ここでは異体字を利用して書き分けた。他にも、余った文字を母音に転用して書き分けるやり方が考えられる。そのようなわけで、別表は、類似音を強いて割りふった便宜的な方法のひとつに過ぎない。

〈表記例〉

- 福沢諭吉 
- 夏目漱石 
- 樋口一葉 
- 大阪 

直音・撥音 (一の両側は等価。[ ]内はその左側の代替字。( )をはずすとヘボン式に似る)

	あ段	い段	う段	え段	お段
あ行				〃	
か行				〃	
さ行				〃	
た行				〃	
な行				〃	
は行				〃	
ま行				〃	
や行				〃	
ら行				〃	
わ行				〃	
ん					

濁音・半濁音

が行				〃	
ざ行				〃	
だ行				〃	
ば行				〃	
ぱ行				〃	

直拗音

きゃ行			
しゃ行			
ちゃ行			
にゃ行			
ひゃ行			
みゃ行			

濁拗音・半濁拗音

ぎゃ行			
じゃ行			
ぢゃ行			
びゃ行			
ぴゃ行			

促音 (子音部分を重複させる。例示は「あ」段のみ)

っか	
っさ	
った	
っば	



エジプト新王朝の供養塔の複製 (標本番号H9534)